
ノール（M） 「『デオフェアリー・ノールと秘密の部屋』

スマル7 『ノネナール』」

一拍の間

ノール（M） 「わたしの名前はノール。どこにでもいる、普通のデオフェアリーなの！この世界から悪いにおいをなくすため、カルモア学園の学生になって、人間の世界を見守っているんだ」

SE…ノックの音。

SE…ガチャ！とドアが開く音。

エリカ 「おはようございます、お姉様！」

ノール（M）「この、ノールのことを『お姉様』と呼ぶ騒がしい子は、後輩のエリカ。実はデオファエアリー候補生なんだけど、わたしと一緒にカルモア学園で消臭の任務についているんだよね」

えり「おはようございます」

ノール（M）「こっちの、あざといロリっ子は、後輩のえり。新入生で、消臭部に入学してきた変わった子。どんな子なのか、まだ、よくわかんないんだよね」

ノール「じゃーん！」

エリカ「今週はなんでしよう？」

ノール「今日は、久しぶりに体操着」

えり「うごきやすそうです」

エリカ「ああ、駄目なひとには見えないブルマーですね」

ノール「ちがうちがう。今日は『駄目なひとには見えない
スパッツ』」

エリカ「スパッツ？ 普通ですね」

ノール「駄目なひとたちの中では『むしろそっちの方が』って
ひともいるらしい」

えり「はわく、マニアックです」

エリカ「でも、見えないんですよね」

ノール「うん。駄目なひとには見えない」

エリカ「それは、残念ですねえ」

えり「ざんねんですねえ……」

一拍の間

エリカ「そういえば、お姉さま」

ノール「なに？」

エリカ「この間、お誕生日だったんですよね？」

ノール「そうだよ。5月は生誕月間だった」

エリカ「それは、おめでとうございました」

えり「おめでとうございますー!!」

ノール「ありがとうー」

エリカ「お姉さま、昭和何年生まれでしたっけ？」

ノール「ノールはね、しょう………昭和って、なあに？（棒）」

エリカ「さすがに、昭和がわからないと、アホの子ですよ」

ノール「ノールは平成だよ。21世紀の子」

エリカ「そうですか。さつき答えかけた気がしましたけど」

ノール「気のせいだと思う」

一拍の間

えり「今日はどちらに行くんですかー？」

ノール「せっかくだから、外に行こう」

エリカ「では、校舎裏を散策すると言うのは どうでしょう？」

えり「さわやかですー」

ノール「じゃあ、決定！ いったみよー！」

SE…ガチャ、とドアが開く音。

一拍の間

SE…歩く音 (F・O・)

エリカ「うわ、今日は暑いですね」

えり「ほんとですねー」

ノール「汗かくよね」

エリカ「じゃあ、まずお姉様の汗のにおいを消臭ですか？」

ノール「ノールの汗は臭くないよ！ 無味無臭」

エリカ「…：味見したんですか？」

ノール「してないよ！ ちょっとした言葉のアヤじゃん」

エリカ「いや、想像するとマニアックな光景ですね」

ノール「どんなマニアなの、それ」

エリカ「ペロリスト、ですか？」

えり「ふわあ、いぬさんみたいでかわいいですー」

ノール「絶対、かわいくないよ!!」

一拍の間

ノール「……おや？」

エリカ「お姉さま……の、においですか？」

ノール「なんでエリカは、毎回ノールを真っ先に疑うのかな」

エリカ「だって……なんというか、昭和のにおいがしませんか？」

えり「あー、激動の70年代、絶頂の80年代ですう」

ノール「だから、ノールは昭和じゃないからっ!!」

エリカ「お姉様じゃないとしたら……どこからしてくるん

でしようか、このにおいは」

えり「先輩からじゃないんですね、不思議ですう」

ノール「ちつとも不思議じゃないっ！」

えり「はわーっ!？」

ノール「これは……悪臭だよ！」

えり「図書館の奥の方とか……そんな古くい、においですう」

エリカ「あと、おじさんたちでいっぱいな終電の臭いですね」

ノール「古びた古本屋のにおいと、久々に開けた物置のかび臭

さとか……そして、親父くささとか！」

えり「はう、たしかにおじさんっぽいにおいですう……」

ノール「そんな昭和臭ただよう『加齢臭』の成分……どこかに、

ノネナールがあるはずだよ！」

一拍の間

ノリゾウ「よばれてとびでて、じゃじゃじゃじゃーん!!」

SE…それっぽい登場SE

ノール「いきなり、なに!？」

エリカ「誰かクシャミしました？」

えり「はい？」

ノリゾウ「大魔王ではないでおじやるよ」

エリカ「で、どちら様ですか？」

ノリゾウ「我が名は『ノネナールのノリゾウ』！ 悪臭四天王が
一人として、この学園の臭塗を任されておる」

一拍の間

エリカ「ノネナール!? デオアリーナのカードに、だらけて

寝っ転がっている人みたいな図が書いてある、あの！」

ノール「なんの話？」

エリカ「えり、気をつけて！ 悪臭だよ！！」

えり「はわー、きをつけますー」

ノール「なに、いじめ？ ノールをガン無視？」

一拍の間

ノリゾウ「ふん、どいつもこいつも『ノネナール』と言えば、

二言目には『加齢臭』と決めつけおってからに」

ノール「だって、加齢臭の原因物質じゃん」

ノリゾウ「それだけではないわっ！ ノネナールは熟成された

ビール、ソバ、そしてキュウリのおいの元でもある、

おいしい香りの主成分でもあるのだぞっ！」

エリカ「ビール、ソバ、キュウリって取り合わせが、なんか

オヤジくさいですね」

えり「あう、ビールのめません」

ノール「だいたい『悪臭四天王』って、どういうこと？」

ノリゾウ「ふっ……そこに気がつくとはな」

ノール「自分で名乗ってたじゃん」

エリカ「どういう基準で『四天王』なんですかね？」

ノリゾウ「そうさな……簡単に言うと、だ」

エリカ「はい？」

ノリゾウ「六本木ヒルズの……」

エリカ「六本木ヒルズなの？」

ノリゾウ「『ねえちゃん、ええケツ』」

えり「『してんのお』」

ノール「……華麗に変身ッ！ でおどあーっ!!」

SE・変身SE&BGM

ノール「見た目はキュートに、中身は本気！デオフェアリー・

ノール！」

ノリゾウ「までい！！ 話はこれからだぞ！」

ノール「もういいっ、しゃべるなっ！」

一拍の間

えり「はわー……ちっちゃくて、かわいいですう」

エリカ「なんで、変身前を見ていて、そんな感想がでてくる

かなあ？」

ノール「どういうことかな、エリカ？」

エリカ「はわー、かわいいですう」

ノール「うるさいっ！！」

一拍の間

ノリゾウ「そもそも、『オヤジ臭い』とは、解せぬことをいい

おるわ」

ノール「だって、オヤジ臭の元じゃん」

ノリゾウ「全くもってわかっておらんのお。ノネナールが加齢臭

の元であると、実証した実験の内容をしらんのか？」

エリカ「しりたくもないですね」

ノリゾウ「日本のとある化粧品メーカーが、26歳から75歳までの

女性が3日間着用したシャツから捕集した体臭成分を

分析して実証したのだ！」

えり「三日間、着たままってことでしょうか？（嫌そう）」

エリカ「それは……ある種の紳士の方々にはご褒美ですね」

ノール「75歳も？」

ノリゾウ「加齢臭は女性にもあるのだ。『オヤジ』ばかりと

思っていると、痛い目に遭うぞ。自分の体臭は、自分

ではわからぬ故にな」

エリカ「ああ、それでお姉様は昭和臭が……」
ノール「ノール、昭和臭なんてしないよっ!!」

一拍の間

エリカ「それはそれとして！ 今週のイラスト募集は『スパッツ
・ノールお姉様』です！」

えり「採用された方には、『特製・スパッツバージョン』の
デオフェアリー・ノールをプレゼントしちゃいます！」

ノリゾウ「ほほお！ それはご褒美だのお！」

ノール「だから、募集しないよっ!! 特製品もつくんない!!」

えり「スパッツつながりで『ユリ・なんとかのコスプレをして

いるノール先輩』イラストも歓迎です」

ノール「そんな、権利問題がややこしそうなイラスト、歓迎
しないからねっ!!」

一拍の間

ノリヅウ「全く持って埒もない。では、四天王たるワシの力を
見せてやるかな」

ノール「らちもないって、さっき『ごほうびだのお!』とか
喜んでたじゃん」

エリカ「案外、駄目な人なんですかね」

ノリヅウ「いくぞおっ!……人体のニオイを、臭塗ッ!!」

SE…臭塗っぽいSE

エリカ「うわ! 埼京線終電のにおいが!」

えり「常磐線の終電も、おおむねこんな感じですよ」

ノール「具体的な路線名、禁止っ!!」

エリカ「でも、人体に直接スプレーできないんですよ」

ノール「そうなんだよね……やっかいだなあ、もお」

ノリヅウ「ふははは!! 四天王の実力、思い知ったか?」

ノール「くそお、ねーちゃんええケツ四天王めー!」

ノリゾウ「そこの、デオフェアリーよ。噂は聞いているぞ」

ノール「見た目はキュートで中身は本気って？」

ノリゾウ「あふれる昭和臭を武器にした、手強いデオフェアリー

がいるとな」

ノール「いったい、どういうルートから流れた噂なわけ!？」

エリカ「さすが、お姉様の昭和臭は伝説レベルですね。」

えり「はわり、すごいですー！ 昭和を極めた有名人ですー」

ノール「ここ!?! 噂の出どころは、ここ!?!」

ノリゾウ「昭和臭を甘く見るな！ 昭和臭をもてあそばせば、

いつかおぬしも昭和をこじらせてしまうぞ！」

ノール「だから、昭和じゃないっていつてるじゃん!!」

エリカ「なんだから、おつかないですね、昭和」

えり「ふわぁ、昭和のダークサイドの恐怖ですー」

ノリゾウ「まあ、誰のこととは言わんがな……」

「いつだか、ある男が皆で飲んでいるときに『小学生の

ころ、人気のアイドルと言えば誰だった?』と言う話題

になってな」

ノリゾウ「皆、楽しげに『ミニモニ。だったよ』『安室かなあ』

『俺、高橋由美子好きだった』『ふるーい！』などと、盛り上がってな」

「その男は、その様子を見ながら黙って飲んでいたわけだが……向かいに座っている20代の小娘から」

「『上城さんは誰でした？』と尋ねられたので、ヤツも小学生の頃を思い出し、何気なくこういったのだ」

「『ピンクレディ』——とな」

「……一瞬で静まりかえる一同……この空気の重さ、お主にわかるか!？」

ノール「わかんないから!!」

ノリゾウ「あとでその男は後悔したという……『おにゃんこクラブにすればよかった』とな」

「寂しい話とおもわんか？ 所詮、結果は同じこと！ 昭和をこじらせると、このようなことになるのだぞ！」

ノール「だから！ なんでその話をノールに言うわけ!？」

ノリゾウ「また、誰のこととはいわんがな」

「ある男が、秘密の部屋の脚本を書いた時に、軽く昭和ネタを入れこんだところ——『誰もわかりませんよ』とスタッフ先輩から一発でボツを食らったことがあった
そうな」

「『いや、クレイジーキャッツはわかるだろう!?』と食い下がったものの『クレイジーキャッツはわかるけど、上城さんと違って内容までしりません』と一刀両断だったという」

「その男は放送後に涙したという……『ハラホロヒレハレがわからんというのか!?』とな」

「わかるかな？ わっかんねえだろうなあ……」

——このフレーズもわからんと言うのか!?」

ノール「とめてー！ 誰か、かみじょーをとめてー!! (大声)」

エリカ「お、おちついてください、お姉様！ 上城じゃなくて、

ノネナールですよ」

ノール「だって、かみじょーじゃん!」

エリカ「上城なんですけど、上城じゃなくてノネナールってこと
になってるんです！　というか、現実と物語のけじめを
つけましょう、お姉様」

えり「はうー、強敵です」

ノール「もー！　エリカ、やっつけてっ！」

エリカ「……よし、お姉様のかたきっ！」

エリカ「らぶらぶ・ぽっぴんぱんっっ！！」

SE…飛燕疾風脚の炸裂音

ノリゾウ「ぐはあ!？」

エリカ「どうだあ!？」

一拍の間

ノール「こらーっ!!　飛燕疾風脚単発で終わらせるの禁止ー！

龍虎乱舞で追い打ちくらいかけなさいー！」

エリカ「ちよ、お姉様!? スプレー缶持ったまま飛燕疾風脚を

炸裂させたのには、ツツコミなしですか？」

ノール「えりも、いけー！」

えり「はわっ!? そんな、むりですよー！」

ノール「つべこべ言うなー! やっつけろー!!」

えり「はうー……ではいきますよう」

えり「らぶらぶ・ぽっぴんぱんちゅ(自信なさげに)」

SE…いろいろな炸裂音

ノール「そうだー! ドライブキャンセルで必殺技から超必殺技

につなぐコンボ炸裂だー!!」

エリカ「あ、ああああ……(啞然)」

えり「ふあく……月を見るたび、おもいだしてください」

一拍の間

ノリゾウ「ふっ……ワシも焼きがまわったわい」

エリカ「そうやって、渋く決めようとしているところに、空気を

読まずにお姉様がとどめを！」

ノール「よーし、情け無用でいくよっ！」

一拍の間

ノール「オウ・サダハールツ!!」

SE..オウ・サダハールのSE

ノリゾウ「うわー、だめだー!! (棒読み)」

SE..悪臭退散のSE

ノール「やったあっ!?!」

えり「ふわあく。ノール先輩は消臭剤のホームラン王ですー」

エリカ「デオアリーナもよろしく」

一拍の間

バスメル「おお！ノールちゃん!？」

ノール「うわあ!?! いきなりなにごとー!?!」

バスメル「なにか音がすると思っけてきたら……あれは神様

からの福音だったのかもしれないな」

えり「福音ですか。ラテン語にすると『えばんげりおん』
ですねぇ」

エリカ「おめでとー、おめでとー」

一拍の間

ノール(M)「そんなわけでえ……(やる気なさそうに)」

ノール(M)「この、いきなりうっとうしい、キラキラ二枚目の
お兄ちゃんは『バスメル王子』」

ノール（M）「別にアラブかどこかの王子様ってワケじゃなくて、ニックネームってヤツ？」

ノール（M）「なんでか知らないけど、ノールのことを妙に慕っていて。何かというと、つきまとってクサイ台詞で口説こうしてるんだけど。クサイ台詞って大の苦手なんだよね」

一拍の間

バスメル「きれいな瞳だね、ノールちゃん」

ノール「ちかい、ちかい！」

バスメル「失礼、つい吸い寄せられてしまったよ」

「キミの瞳は吸引力の衰えない、ただ二つの瞳だね」

ノール「なに、これは笑えばいいの？」

エリカ「瞳をキラキラさせて、きゅん☆とすればいいと

思いますよ、お姉様」

ノール「無理〜」

一拍の間

えり「ふわぁ〜……一度でいいから、男の人にそんなことを

言われてみたいです（照れ）」

ノール・エリカ「「えー……っ!?!」」

エリカ「い、いや……明らかに掃除機呼びわりしてるけど、

いいの!?!」

ノール「ほら、王子！ 言って！ ここぞとばかりに言って！」

バスメル「僕の愛の言葉は、この世界でただ一人にしか捧げない

誓いを立てたんだ。そう……ノールちゃん、キミだけに」

えり「素敵ですう〜。ノール先輩、うらやましいです〜」

ノール「いつでも代わるよ、だから！」

SE…携帯の着ボイス音

バスメル「……ああ、ドワンゴ・ドット・JPでダウンロード

販売している、ノールちゃんの着ボイスが」

えり「やっぱりほしいですう。それ以外にもあるんですか？」

ノール「ステマだけど、ドワンゴ・ドット・JP取り放題の会員

登録をすれば、いろいろな着ボイスがゲットできるんじ

やないかな？」

エリカ「全然ステルスじゃないですよね」

バスメル「すまない、行かなくてはいけなくなったよ」

ノール「はい、さようなら（棒読み）」

バスメル「では、またあおう！ 恋のエヴァンゲリオン!!」

SE…歩く音（F・O・）

ノール「疲れたけど……とりあえず、加齢臭が消えたからよしと

しようか」

えり「はい、さすが先輩ですう」

ノール「昭和臭も消えた。きれいさっぱり」

エリカ「え？ そっちはノールお姉様の胸にいまも生きているん

じゃないですか？」

ノール「エリカっ!？」

SE…バットスイングの音

エリカ「わあ!! オウ・サダハールは、普通に凶器攻撃ですから、

やめてくださいー!!」

ノール「うるさいっ!! かくごしろーっ!!」

SE…走る音 (F. O.)

エリカ「やですーっ!」

SE…走る音 (F. O.)

えり「はわっ! ま、まっってくださいー」

SE..走る音(F.O.)

一拍の間

エリカ(N) 「こうして、ノネナールは消臭された」

エリカ(N) 「しかし、これで終わりではない」

エリカ(N) 「四天王の一人を倒した……が、こんなのがまだ3人もいるのか？」

エリカ(N) 「ノールの昭和ネタにツツコミを入れるエリカも、案外昭和ではないのか？ クレイジーキャッツは駄目でも、コント55号はOKですか？」

エリカ(N) 「デオフェアリー・ノールの、消臭は終わらない……」

一拍の間

エリカ (N) 「漂う悪臭を、なんとする」
エリカ (N) 「芳香剤では、ごまかしきれぬ」
エリカ (N) 「換気扇でも、どうにもならぬ」
エリカ (N) 「マイクロゲルで、消臭する」
エリカ (N) 「また、来週も……」
ノール (N) 「『デオ・デオドアー!』」

おわり。